



百有部類

延文沖百卷 一三四五

特別  
84  
8196  
8



839

八4

8196

8



<2016-206>

延文御百首

作者

御製 後光嚴院

進子内親王

實乃女

公孫女

額實女

仁和寺宮 法守後伏見院皇子  
号福河院御堂

槐井宮 号胤二  
后伏見院皇子

重護院宮 号恭  
后周院皇子

序之官 考一不後依君統留子

贊後修心 前大德心後光心息  
二室院

開白良基

前大政大臣 公質

右大臣 純教

左大臣 通嗣

内大臣 通相

前内大臣 公作

前大納言 高氏 征夷大將軍

前大納言 純教 正二位

持大納言 實夏

按察使 實繼

持大納言 實俊

持大納言 忠季

釋室 為室法名  
正二位大納言文文二月日題六十八

宣靜 云推法名乎正親町  
從二位大納言文文十七題六十四

前中納言 源有光 從二位

前冬議 實名 從二位

冬議 為的

冬議 左近中納言 隆

旅人頭在中矣發東村光朝臣  
 左邊中拍落尔行補朝臣  
 左邊中拍發尔雅冬朝臣  
 左邊中拍發尔乃重朝臣  
 右邊少拍落尔为重朝臣  
 今度御百首不及枚揮  
 牙教命之千二百首  
 平人之十之人

題

春 二十首

立春

震 二首

鶯

若策

春雪

梅 二首

柳

春面

白雁

春月

花 八首

款冬

踏

苦春

夏 十五首

更衣

郭公 三首

早苗

魚橋

六月夜 二首

夏月

夏草

鴉門

螢

夕立

細涼

夏後

秋二十首

早秋

七夕

荻

秋

雁

鹿

秋夕

秋田

月二首

虫

露

捲衣

菊

紅葉二首

九月盡

冬十二首

時雨

落葉

霜

雪

冰

冬月

水鳥

水鳥

霰

雪三首

鷹狩

炭竈

歲暮

冬二十首

寄風意

雪

朔

杜

月

橋

藻

綠

秋

鳩

楮

蛛

鏡

枕

蓮

衣

紙

弓

船

瘡

雜十首

曉鷄

東曉

浦松

庭竹

山家

田家

羈旅

眺望

述懐

祝文



雜百首和歌

名もなき御石巻十枚 言二八二首

春二十首

御製

五春

あのみ八重はあはさきのみちをきかひりききこひぬらぬ  
處

あはれききこひぬらぬききこひぬらぬききこひぬらぬ  
ききこひぬらぬききこひぬらぬききこひぬらぬ

常

あはれききこひぬらぬききこひぬらぬききこひぬらぬ

あはれ

物にほして世はたふさふさとはせんちかたふさふさの世に

春言

あやなくともはなをそよあけの梅のあしをちりばらん

梅

梅のさくら梢にまうかざし梅もさくらよをばらり〜  
さくらさきのさくら梅のさくら梅のさくら梅のさくら

柳

やせれたまきし〜さくらさくらさくらさくらさくら

春言

あつ〜さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

改行

ひまの裏に消えても〜さくらさくらさくらさくら

春言

り交ったあつ〜さくらさくらさくらさくらさくら

花

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら  
あつ〜さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら  
あつ〜さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら  
さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら





友平

あはれなる心持の御座り候へば

友平

あはれなる心持の御座り候へば

精河

あはれなる心持の御座り候へば

福

あはれなる心持の御座り候へば

又直

あはれなる心持の御座り候へば

知源

あはれなる心持の御座り候へば

友接

あはれなる心持の御座り候へば

秋二十首

早秋

あはれなる心持の御座り候へば

七夕

あはれなる心持の御座り候へば

藤

木

いづれにや木の葉のひらくはさやかにて

木

ふゆのふゆに木は葉をさかせぬも  
しるべし秋の風は木の葉をさかせぬも  
あつたはなは木の葉をさかせぬも  
なごりのつゆは木の葉をさかせぬも  
あつたはなは木の葉をさかせぬも  
なごりのつゆは木の葉をさかせぬも

木

いづれにや木の葉のひらくはさやかにて

秋田

あつたはなは木の葉をさかせぬも

秋又

あつたはなは木の葉をさかせぬも

麻

あつたはなは木の葉をさかせぬも

原

あつたはなは木の葉をさかせぬも

萩

あつたはなは木の葉をさかせぬも

里人のあはれの煙らうとて事なむかき 151

接夜

園にほのぼののあはれをみれば 152

菊

うららかにあはれをみれば 153

紅葉

きこゆればあはれをみれば 154

秋のあはれをみれば 155

九月

いづれにあはれをみれば 156

冬十首

雪

あはれをみれば 157

霜

あはれをみれば 158

氷

あはれをみれば 159

水

あはれをみれば 160

水

人あらばたのむらふておのれもいぬらん

なほ

ちりちり一毒の指にすくえりてはまをいぬるは

なほ

あふくははらねをいぬるはまをいぬるは

なほ

あつらふもはねをいぬるはまをいぬるは

なほ

あつらふもはねをいぬるはまをいぬるは

なほ

あつらふもはねをいぬるはまをいぬるは  
あつらふもはねをいぬるはまをいぬるは  
あつらふもはねをいぬるはまをいぬるは  
あつらふもはねをいぬるはまをいぬるは

なほ

あつらふもはねをいぬるはまをいぬるは

なほ

あつらふもはねをいぬるはまをいぬるは

なほ

あつらふもはねをいぬるはまをいぬるは

なほ

年月表

○*（faint cursive characters）*

一書一

○*（faint cursive characters）*

一綱一

○*（faint cursive characters）*

一杜一

○*（faint cursive characters）*

一園一

○*（faint cursive characters）*

一橋一

○*（faint cursive characters）*

一藤一

○*（faint cursive characters）*

一藤一

○*（faint cursive characters）*

一校一

○*（faint cursive characters）*

一巻一

○*（faint cursive characters）*

方格紙

青い紙の裏の面を白く塗る

一箱

青い紙の裏の面を白く塗る

一箱

青い紙の裏の面を白く塗る

一箱

青い紙の裏の面を白く塗る

一箱

青い紙の裏の面を白く塗る

一箱

青い紙の裏の面を白く塗る

一箱

青い紙の裏の面を白く塗る

一箱

青い紙の裏の面を白く塗る

一箱

青い紙の裏の面を白く塗る

一箱

青い紙の裏の面を白く塗る

雜十首

曉鶉

~~~~~~

黃鸝

~~~~~~

浦松

~~~~~~

春行

~~~~~~

山鳥

~~~~~~

山鳥

~~~~~~

羈旅

~~~~~~

無名

~~~~~~

述懷

~~~~~~

祝云



申すにたれはあはれなるにむかしはあはれなるにむかしはあはれなるに

春二十首

之春

あはれなるにむかしはあはれなるにむかしはあはれなるに

之春

あはれなるにむかしはあはれなるにむかしはあはれなるに

之春

あはれなるにむかしはあはれなるにむかしはあはれなるに

之春

道子の歌集

巻の初 第十八枚  
沖野 櫻子 書

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

花

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

梅

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

柳

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

竹

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

菊

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

草

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

花

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page.

歎き

花よそあ〜とほほえしくもいふことたか〜とほほえしく

友

うほほえしくもいふことたか〜とほほえしく

善書

善書

友十の首

史記

友とあまき〜とほほえしくもいふことたか〜とほほえしく

子規

あまの福にたか〜とほほえしくもいふことたか〜とほほえしく  
月ひらきあまのよ〜とほほえしくもいふことたか〜とほほえしく  
村あまのよ〜とほほえしくもいふことたか〜とほほえしく

牛首

あまの福にたか〜とほほえしくもいふことたか〜とほほえしく  
あまの福にたか〜とほほえしくもいふことたか〜とほほえしく

あまの福にたか〜とほほえしくもいふことたか〜とほほえしく  
あまの福にたか〜とほほえしくもいふことたか〜とほほえしく

あまの福にたか〜とほほえしくもいふことたか〜とほほえしく  
あまの福にたか〜とほほえしくもいふことたか〜とほほえしく

夏月

あはれなるに梅よをよみてとてさみよきとて

麦草

あはれなるに梅よをよみてとてさみよきとて

鴨川

あはれなるに梅よをよみてとてさみよきとて

兼

あはれなるに梅よをよみてとてさみよきとて

夕暮

あはれなるに梅よをよみてとてさみよきとて

納涼

あはれなるに梅よをよみてとてさみよきとて

夏夜

あはれなるに梅よをよみてとてさみよきとて

秋二首

早秋

あはれなるに梅よをよみてとてさみよきとて

七夕

あはれなるに梅よをよみてとてさみよきとて

萩

書

~~~~~

書

~~~~~

書

~~~~~

林田

~~~~~

林夕

~~~~~

藤

~~~~~

書

~~~~~

藤

~~~~~

水

Handwritten cursive text line 1

Handwritten characters

Handwritten cursive text line 2

Handwritten characters

Handwritten cursive text line 3

Handwritten characters

Handwritten cursive text line 4

Handwritten characters

Handwritten characters

Handwritten cursive text line 1

Handwritten characters

Handwritten cursive text line 2

Handwritten cursive text line 3

Handwritten characters

Handwritten cursive text line 4

Handwritten characters

Handwritten cursive text line 5

Handwritten characters

Handwritten cursive text line 6

あはれなる心にて

あはれ

あはれなる心にて

あはれ

あはれなる心にて

あはれ

あはれなる心にて

あはれ

あはれなる心にて

あはれ

あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて  
あはれなる心にて

あはれ

あはれなる心にて

あはれ

あはれなる心にて

あはれ

あはれなる心にて

あはれ

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

一 店

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

一 枚

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

一 條

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

一 條

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

一 條

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

一 圓

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

一 社

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

一 編

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

一 冊

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

手 厚 紙



夕暮の空を渡る鳥の影が  
静かに残る

一巻一

わが心は静かに  
静かに

一巻一

静かに  
静かに

一巻一

静かに  
静かに

一巻一

静かに  
静かに

一巻一

静かに  
静かに

一巻一

静かに  
静かに

一巻一

静かに  
静かに

一巻一

静かに  
静かに

一巻一

静かに  
静かに

静かに

雜十首

曉鶴

あさのをたけりてはけしむるもさるる

東麓

かえりてあふりてはけしむるもさるる

浦松

あさのをたけりてはけしむるもさるる

在舟

あさのをたけりてはけしむるもさるる

山家

あさのをたけりてはけしむるもさるる

山家

あさのをたけりてはけしむるもさるる

霧後

あさのをたけりてはけしむるもさるる

船中

あさのをたけりてはけしむるもさるる

迷霧

あさのをたけりてはけしむるもさるる

祝言

入道大納言安房守  
 十之廿二日  
 春夜紅梅柳楊柳  
 冬之夜  
 雜二夜  
 十之廿二日  
 十之廿二日

入道大納言安房守

十之廿二日  
 十之廿二日

春夜紅梅柳楊柳

冬之夜

雜二夜

春二十首

立書

春夜紅梅柳楊柳

立書

春夜紅梅柳楊柳

鶯

行のたかむらさきかきつゝのうららけをきかぬ

若菜

むくよおのこふりかひかへしあはれしるき

喜雪

喜せらるるしむらさきかきつゝのうららけ

梅

うららけをきかぬあはれしるき

みぢかきつゝのうららけをきかぬ

柳

鳥のうららけをきかぬあはれしるき

喜雪

あはれしるき

梅

あはれしるき

喜雪

あはれしるき

梅

あはれしるき

あはれしるき

あはれなる御心にてはなれぬ御心にてはなれぬ

御書

あはれなる御心にてはなれぬ御心にてはなれぬ

御心

あはれなる御心にてはなれぬ御心にてはなれぬ

あはれなる御心にてはなれぬ御心にてはなれぬ

御心

あはれなる御心にてはなれぬ御心にてはなれぬ

御心

夏十文首

あはれなる御心にてはなれぬ御心にてはなれぬ

御心

あはれなる御心にてはなれぬ御心にてはなれぬ

御心

あはれなる御心にてはなれぬ御心にてはなれぬ

御心

あはれなる御心にてはなれぬ御心にてはなれぬ

あはれなる御心にてはなれぬ御心にてはなれぬ

あはれなる御心にてはなれぬ御心にてはなれぬ

夏月

後よりいふに、昔は、  
夏月、

夏月

夏月、

夏月

夏月、

夏月

夏月、

夏月

夏月、

夏月

夏月、

夏月

夏月、

夏月

夏月、

夏月

夏月

夏月、

七支

あまのついでなる栲のなるあまのついでなるあまのついでなる

栲

あまのついでなるあまのついでなるあまのついでなるあまのついでなる

栲

あまのついでなるあまのついでなるあまのついでなるあまのついでなる

一

あまのついでなるあまのついでなるあまのついでなるあまのついでなる

栲

あまのついでなるあまのついでなるあまのついでなるあまのついでなる

栲

あまのついでなるあまのついでなるあまのついでなるあまのついでなる

栲

あまのついでなるあまのついでなるあまのついでなるあまのついでなる

月

あまのついでなるあまのついでなるあまのついでなるあまのついでなる

あまのついでなるあまのついでなるあまのついでなるあまのついでなる

あまのついでなるあまのついでなるあまのついでなるあまのついでなる

あまのついでなるあまのついでなるあまのついでなるあまのついでなる

あまのついでなるあまのついでなるあまのついでなるあまのついでなる

虫

昔より今も変わらぬ世の常なり

昔

昔より今も変わらぬ世の常なり

昔

昔より今も変わらぬ世の常なり

昔

昔より今も変わらぬ世の常なり

昔

昔より今も変わらぬ世の常なり

昔より今も変わらぬ世の常なり

九月

昔より今も変わらぬ世の常なり

十月

時雨

昔より今も変わらぬ世の常なり

落着

昔より今も変わらぬ世の常なり

昔

昔より今も変わらぬ世の常なり



多岐の山を越えて、

春の電

花の香りをかぎ、

春の情

心の中を流れて、

春の風をきいて、

春の空をながめて、

春

春の光を浴びて、

春

春の音をきいて、

春

春の夢をみて、

春

春の涙を流して、

春

春の涙を流して、

春

春の涙を流して、

春

蔵書

Myriophyllum spicatum

卷二十九首

奇風意

Myriophyllum spicatum

一書一

Myriophyllum spicatum

一編一

Myriophyllum spicatum

一社一

Myriophyllum spicatum

一園一

Myriophyllum spicatum

一橋一

Myriophyllum spicatum

一康一

Myriophyllum spicatum

一藤一

Myriophyllum spicatum

一校一

一松

Handwritten cursive script, likely a name or title.

一五

Handwritten cursive script.

一夏

Handwritten cursive script.

一友

Handwritten cursive script.

一(四)

Handwritten cursive script.

一松

Handwritten cursive script.

一鏡

Handwritten cursive script.

一珠

Handwritten cursive script.

一物

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

あ後の海よもくちしとてはむらさき花のついで

秀瑞集

程ありなむらさき花のついで

雜十首

雙鶺鴒

雙鶺鴒のふかきとてあしなむらさき花のついで

兼行

行ふこころいひてはむらさき花のついで

浦松

あつこころいひてはむらさき花のついで

兼行

あつこころいひてはむらさき花のついで

田家

あつこころいひてはむらさき花のついで

田家

あつこころいひてはむらさき花のついで

兼行

あつこころいひてはむらさき花のついで

兼行

あつこころいひてはむらさき花のついで

連傍

母の中寄るなうしとあき後敷のわがとまら

経云

海をも極むるのうらやう代り母よ公母とて

いふ

入道持大納言と彦女 色紙十  
七枚

高木寸之吉 錦八枚上 紅下 白  
文様

奥八枚上 花回下 白文 彦女

春二十首

立春

ふのあけ春はけしきしらららけあけつたはるに春にふり

産

らふらふのいふ春はけあけつたはるに春にふり  
はるはらふらふのいふ春はけあけつたはるに春にふり

巻

よき春の風をうけて花はさかす

春の風

さかす花の香をうけて心はほろほろ

春の風

さかす花の香をうけて心はほろほろ

梅

さかす花の香をうけて心はほろほろ

柳

さかす花の香をうけて心はほろほろ

のち

春の風

さかす花の香をうけて心はほろほろ

梅

さかす花の香をうけて心はほろほろ

春の風

さかす花の香をうけて心はほろほろ

梅

さかす花の香をうけて心はほろほろ

のうらやまのふかやまの梢より葉に名枝のむぎ  
らうのうらやまの梢むぎのうらやま今れゆめうらやま

新巻

あやうもむぎのうらやまの梢むぎのうらやま

友

あやうもむぎのうらやまの梢むぎのうらやま

書巻

あやうもむぎのうらやまの梢むぎのうらやま

夏十巻

文夜

文夜うらやまの梢むぎのうらやま

子親

あやうもむぎのうらやまの梢むぎのうらやま

あやうもむぎのうらやまの梢むぎのうらやま

あやうもむぎのうらやまの梢むぎのうらやま

お苗

あやうもむぎのうらやまの梢むぎのうらやま

お橋

あやうもむぎのうらやまの梢むぎのうらやま

お月

おろしきものたもみしはまはたかきあがりつとくまを  
よめるそとあはれあはれ月あはれつとくまのあはれな

夏月

みよのたもみしはまはたかきあがりつとくまのあはれな  
夏草

あはれなつとくまのあはれな  
鴨川

鴨川

あはれなつとくまのあはれな  
夏草

夏草

あはれなつとくまのあはれな  
夏草

夕立

あはれなつとくまのあはれな  
納涼

納涼

あはれなつとくまのあはれな  
夏草

夏草

あはれなつとくまのあはれな  
秋

秋

秋

あはれなつとくまのあはれな  
七夕

七夕



まよひたる勢よりいふはあはれあはれのうらみは深しき

萩

まよひたる萩の中葉よびまふれりまよひともまよひたる

萩

麻のぬれもふそらうつらわき萩を懐くまよひのあは

鳥

名もまよひ神あはれとらうとて雲ちまよひた初め

麻

まよひたるまよひあはれはまよひ麻の初めとらうとて

秋夕

神まよひ

まよひたる麻葉は虫のまよひともまよひたる萩の夕くれ

秋田

まよひたる萩の葉はまよひとて目撃するまよひの初め

月

西の葉はまよひのまよひらみよ月のまよひたる萩を身にむ  
これまよひたるまよひもまよひたるまよひのまよひ月  
まよひたる萩のまよひもまよひたるまよひのまよひ月  
まよひたるまよひのまよひもまよひたるまよひのまよひ月  
まよひたるまよひのまよひもまよひたるまよひのまよひ月  
まよひたるまよひのまよひもまよひたるまよひのまよひ月

虫

蒼くくは園よの雲いあなをきぬうみそとひさうの

音

またのしほにましく雲こめてはついでさうあつたの

揚夜

こゝろにきつゝあやむあつていさひらひあひとも夏はむ

兼

ちうちのくたまといさかきう兼こころは雲よ揚ふまると

おまふ

夜らに楳のうらとあふたうか時ぬれをばそめらん  
ゆくたふたの楳のみらりか時ぬとくうとそめぬあか

九月盡

まのこゝろをひらりとせむくうの楳のみこに枯つて

冬十ぬ首

時ぬ

風ふゆく雲にまこふ村時ぬ日けなうに又とそは

落葉

ささめりた時ぬれこつ神世月をよのたそやうに

霜

つひらりと夜ふさむ一鏡に園らういまた雲あふらん

まらふ

ちりばりし心あるに枯しせしをれとて此の人乃を系

水

あはれ河よけしうらみちをわづらふ故もつらわきり

冬月

さしあつた月の身にむすぶ糸のわためてみれば

夕暮

あはれ月の光とあはれあはれとてつらふきり

夕暮

あはれつらわきりあはれあはれとてつらふきり

夕暮

あはれとあはれあはれあはれとてつらふきり

夕暮

あはれあはれの行をきりあはれあはれとてつらふきり  
あはれあはれのあはれあはれとてつらふきり  
あはれのあはれあはれあはれとてつらふきり

夕暮

あはれあはれあはれあはれとてつらふきり

夕暮

あはれあはれあはれあはれとてつらふきり

夕暮

むおもて身とあひびとすもたれく又たれよる年た後まに

戀二十首

寄風意

たのめしとまゝさる人さだむと若さをそねね乃又を

一書一

あまをたれいふもたつるをまゝかゝるに恨こそねんい

一桐一

あゝえ網乃末をあゝいひのさうらふをさるるを

一杜一

み枝よるともたれ洞やあひかゝるをまゝいひ杜の

一園一

人おもらうたあゝいひのさうらふをさるるを

一橋一

つとあゝあゝの事はいふなゝあゝあゝのたの橋

一藤一

玉葉なる浦人さうらふとさる袖乃洞いつまはらう

一藤一

藤のそなた曉あはれをいふとさるつとあゝあゝ

一橋一

うら申いひのさうらふとさるつとあゝあゝのたの橋

二方也意

也者須之也也其見之にやまふれどもいかにいかに

一粒

きりわたりたひのりともきりともいかにいかにいかに

一粒

さしひらききりいれつるはたまたまのめとも粒乃きり

一粒

かけたりみろふえうさともいかにいかにいかにいかに

一粒

ゆりおのともまる粒乃きりたひのりたよそれ粒乃

一粒

きりきりも粒乃たひのりたよそれ粒乃きりたよそれ

一粒

さよなるせふゆあふともいかにいかにいかにいかに

一粒

ひとひらききりいれつるはたまたまのめとも粒乃きり

一粒

あつらひらききりいれつるはたまたまのめとも粒乃きり

一粒

あつらひらききりいれつるはたまたまのめとも粒乃きり

六方清志

楊花のまわりととて昔あそびのころうさぬ入らひのころ

雜十首

曉鶉

鶉のあそびとて昔あそびのころうさぬ入らひのころ

春院

春のあそびとて昔あそびのころうさぬ入らひのころ

浦杉

浦のあそびとて昔あそびのころうさぬ入らひのころ

夜竹

夜のあそびとて昔あそびのころうさぬ入らひのころ

山家

山のあそびとて昔あそびのころうさぬ入らひのころ

田家

田のあそびとて昔あそびのころうさぬ入らひのころ

露草

露のあそびとて昔あそびのころうさぬ入らひのころ

柳花

柳のあそびとて昔あそびのころうさぬ入らひのころ

述懐

かたかな

さびしき春の風をよみかたはるかに

詠ふ

さびしき春の風をよみかたはるかに

春二十首

立春

大納言顯實母

上香下白  
色紙十五枚

高八寸八分水淡付在松貝表裏  
淡々

久しき雲井くくの影日ひのしほしき  
雲

満てあけみよれ光りのみえくあけ方  
あやむらみくくしそり處のこゆる  
雲

まよひしほのこころは雲のしほの  
雲

若菜

いよもやとらをか摘みかたはるかに

まよひ

あはれなる一葉の秋の葉はさよふはるの風の吹く

梅

梅のそよぎくさつたる人かぬよの風のたはる  
風うきうきと梅の枝うき芳ばらうとよのよめ

柳

うきうきと柳の葉はさよふはるの風の吹く

春

春のまはる山道久みよき雨はうきうきと

帰層

人々のまはるたはるはるはるはるはるはるはるはる

五月

五月のまはるはるはるはるはるはるはるはるはる

花

身にうきうきと花はさよふはるの風の吹く  
花のそよぎくさつたる人かぬよの風のたはる  
芳野のまはるはるはるはるはるはるはるはるはる  
花のそよぎくさつたる人かぬよの風のたはる  
花のそよぎくさつたる人かぬよの風のたはる

歎冬

咲きつる花はさよふはるの風の吹く

春

春のまはるはるはるはるはるはるはるはるはる



善のよし

ちんちんまのりんをきく日教の梅のよき言のよし  
夏十人首

更衣

きららぬふのこい<sup>イロ</sup>のよしあよりのあひまに衣の部

子親

あつたまのあむたれんまのよしとらめえ如部ま  
らゆらとあら之にたつ子親のよしえうあまのよし  
幾之アとらまのあてあつたあつたあつたあつたあつた

早苗

黒とやい同しうあつたあつたあつたあつたあつた

急橋

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

六月雨

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

夏月

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

夏草

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

物何

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

賞

秋のまきとくもあきあきとくもあきあきとくもあきあきとくもあきあき

夕立

風をよき雲よき拂ふ夕立の夕立の夕立の夕立の夕立の夕立の夕立の夕立

納涼

ゆらゆら秋風の三秋ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

夏後

伊賀川より秋の水もあきあきとくもあきあきとくもあきあきとくもあきあき

秋二十首

早秋

いとよきと秋とくもあきあきとくもあきあきとくもあきあきとくもあきあき

七夕

たよりとくもあきあきとくもあきあきとくもあきあきとくもあきあき

萩

たれたれ萩とくもあきあきとくもあきあきとくもあきあきとくもあきあき

萩

たれたれ萩とくもあきあきとくもあきあきとくもあきあきとくもあきあき

馬

秋とくもあきあきとくもあきあきとくもあきあきとくもあきあき

麻

きらめく山のまきとくもあきあきとくもあきあきとくもあきあき

蝶々

昔今秋の山田のしきりり涼しく床に寝たぬれり

秋田

萌てあす秋の山田のしきりり涼しく床に寝たぬれり

月

あまきく月さうく輝く葉の月さうく若くかみ加ら舞  
板乃と家乃故の閑くの月氣にあまきく人の心とむん  
くさく松葉みすれぬみされも語あく時秋の葉を  
月さうくとなき秋と次士の海や作てなふふた物を  
家と今却と出くくのあす秋のしらくも光る月さう

虫

秋を免よあぬものしら虫のこまきりし(いまだとあらう)

雪

け里の小倉け山さうあまきくあまきく雪さうく雪さう

掛衣

うしおをわらわきぬ夜衣よの葉さきく日録さ

葉

まじゆく若れ下の庭さうくさうくさう白葉は花

紅葉

山根の深かおひりくさうあまきく雪さうく雪さう  
大井川うらみらむひりくさうあまきく雪さうく雪さう

九月書

うらみらむあまきく雪さうく雪さう(いまだとあらう)

冬十八首

時雨

嵐うぐすふ時雨と先きくまうく(心)おちくはらぬ

蕨菜

吹ふなれうぐすふおちくはらぬ(心)おちくはらぬ

霜

秋の文いあせり霜のふゆき(心)おちくはらぬ

冬草

枯よりりりえてとまき(心)おちくはらぬ

氷

岩乃りりと帯こくき(心)おちくはらぬ

冬月

霜降東(心)おちくはらぬ

子鳥

うぐすふあせりとまき(心)おちくはらぬ

水鳥

水鳥のうぐすふあせりとまき(心)おちくはらぬ

叢

夜衣(心)おちくはらぬ

雪

雪(心)おちくはらぬ

まうかおねむとせし風ふりまうけりたる庭の白雲  
高得

くふと又あかかみのうら夜目と夕ぐれよさうりけ  
炭竈

おせうか津つむ雪のふり来り松とみぢけ焼くま  
栄草

あはれいりあ年のいそごとくうら身ひのけり  
惠二十首

奇風恋

久々あぬをいりくませし風いたるれま  
雲

消之りあかればより雲のあし身にねるさ  
花

ちとくのあひより松年一記やあふちをけり  
杜

さうし松久あやいそんをまかいそその杜の秋の夕雲  
開

いふせんあはれさらの来すは開とまひるさ  
花

笑ふあはれとかうけり花りさあまうに急後らん  
藤

流し神のさしきそあまうみうらむまとのみされあは

奇篠恋

うろくみてみよのそ松とあまのうろくくろくろく

一枚

まのたうろくろくろくろくろくろくろくろく

一枚

かきわくろくろくろくろくろくろくろく

一枚

うろくろくろくろくろくろくろくろく

一枚

あまのそとろくろくろくろくろくろく

一枚

あまのそとろくろくろくろくろくろく

一枚

あまのそとろくろくろくろくろくろく

一枚

あまのそとろくろくろくろくろくろく

一枚

あまのそとろくろくろくろくろくろく

一枚

あまのそとろくろくろくろくろくろく

あまのそとろくろくろくろくろくろく

寄和志

行末の契といふはさうまひなまの山舟に記されし

一 種一

別道路のうかりしよりこまきまひの契ひりし契の種

新十首

曉鶉

鳴りなき老の福きてて同家をせし心は安直な

夜焼

ありさう久よとむる焼のしるしめは身はあは

浦松

住者のきくおとさくまふれとよ老母の松とさく

存竹

年と抑ぬはさく老る宿の竹くよめ人うなれん

山家

よる夜よるくかひかひかひかひかひかひかひ

田家

世の中を秋の田のくはる宿にくまひかひかひ

羈旅

まをまひひひひひひひひひひひひひひひひ

馳市

漕うる波らのくまひかひかひかひかひかひかひ

述懐

和歌の浦のよみ人あはれなるてとれぬあつめひの

詠言

さうりゆかたのまゝのいひかへのあはれあつめひの

詠百首和歌

鳥子色紙十枚糺打言二天七分

沙門法寺 仁和寺宮

春二十首

あはれ

うらみいふまゝのいひかへのあはれあつめひの

あはれ

せいのちとあはれあつめひのあはれあつめひの

あはれあつめひのあはれあつめひのあはれあつめひの

あはれ

あはれあつめひのあはれあつめひのあはれあつめひの

あはれ



あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろ

あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろ

梅

道のなかに咲きいそぐ梅の枝は  
梅の花は紅くして挿ん後のまみこまき人のあはれ

柳

枝より花散る来りてはよしのこゝろをさぐりて  
枝より花散る来りてはよしのこゝろをさぐりて

春雨

春の雨はあまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
春の雨はあまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは

帰丁

あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは

春月

あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは

花

あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは

款冬

あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは  
あまのこゝろをいかにかきとめておぼしめすは

友

毎之死ねわいれつ友は死ねわいれつ又よは死ね  
書すま

それより別れのころより死ねわいれつと死ねわいれつ  
夏十八首

更衣

更衣やうくと神はわいれつわいれつ  
郭云

母より川又言と家宿より神はわいれつわいれつ  
身は死ねわいれつわいれつ郭云わいれつわいれつ  
そのおもひ高よは死ねわいれつわいれつ

早苗

わいれつわいれつわいれつわいれつわいれつわいれつ  
急櫓

たらむ昔の友の神はわいれつわいれつわいれつわいれつ  
八月雨

さなれよみくわいれつわいれつわいれつわいれつわいれつ  
よわいれつわいれつわいれつわいれつわいれつわいれつ  
夏月

友の友はわいれつわいれつわいれつわいれつわいれつ  
夏首

後よ前人とわいれつわいれつわいれつわいれつわいれつ

物川

くしよきるなをよしよと死よふま

堂

月かき入ぬ影ゆたふ影よけそてきあるる

夕立

きり星のりりぬんをたすれ雲にほろり夕立れ雲

納涼

せいのちくれのくすまのせ日あてあふ涼きさのん

夏後

河後ゆりくかほのせよとや死さじ秋の露

殊二十首

早秋

何ゆめ安んじしむのせとあふりり初ぬ秋の物

七夕

ぬきれ庭う焼みさうく星あひた空に海とあふ

萩

青れ萩れむけり秋凡よまぬおれをせりぬん

萩

たきよの山れ庭とろ夕風よ吹くそく夜秋とれた

鷹

くけぬき夕日雲にふれり秋凡よむき初人の交

麻

わがわがのわがの海はうらたしとてはらなるもまを海とて

秋夕

おやあふたつ夕言と秋あるのこころはあはれ秋は

秋田

小山田の霧と雨とをうらたしとてはらなるもまを海とて

月

峯たき梢の月を梅のこころはあはれ秋は  
虫の言とをうらたしとてはらなるもまを海とて  
あはれ秋のあはれをうらたしとてはらなるもまを海とて  
それより園のこころはあはれ秋のあはれをうらたしとてはらなるもまを海とて  
入十まをうらたしとてはらなるもまを海とて

虫

月をむらあさうらたしとてはらなるもまを海とて

雪

よのぬくやうらたしとてはらなるもまを海とて

梅衣

あはれ秋のあはれをうらたしとてはらなるもまを海とて

菊

初霜のあはれをうらたしとてはらなるもまを海とて

紅葉

霧のあはれをうらたしとてはらなるもまを海とて  
それより園のこころはあはれ秋のあはれをうらたしとてはらなるもまを海とて

九月書

世を秋の神の後にあつていふとあはれに河をまはると  
冬十八首

時雨

あつた山の後と夕時日よりのそよ風を  
落葉

秋のこすをうららとの文をまたあつてはる  
霜

朝日くまのこがれ雲曇り  
冬草

わらわのこがれ雲曇り霜枯よりのあつた  
氷

みまのこがれ雲曇り霜枯よりのあつた  
冬月

おれ葉のこがれ雲曇り霜枯よりのあつた  
子鳥

浪のこがれ雲曇り霜枯よりのあつた  
水鳥

霜枯のこがれ雲曇り霜枯よりのあつた  
叢

あつたのこがれ雲曇り霜枯よりのあつた  
雪

枚松原もまよとらうん行あまき雲にと鹿耳管は  
初波山松原の嵐音はく雪ふまねり入あいのま  
津積海積る雪波映まき嵐のまらまられ松原

鷹將

う一雪の初雪はまの初らん平あまきくうてあ

炭竈

いりせんまのまき火のこまらまのまらまら

業書

一年の又くまのまらけくくと身あまき縁ま

恋二十首

寄風恋

り縁くくに人をまきあまきまら下風らん

一雲

公あは雲はまらにまき行をまらあまの晴の中ら

一松

富士初まわらりあまきまらまらまらまら

一杜

あまあまのまらまらまらまらまらまら

一冥

東海あまのまらまらまらまらまらまら

一橋

我意らん先の岩橋中流く東は雲とあまらり

一葉一

はなをてしよむらじつてはくはなをのりて

一葉一

きよはつこのまゝよけはるはつひしよむらじつてはくはなをのりて

一枚一

しよむらじつてはくはなをのりてはなをのりて

一葉一

はなをのりてはなをのりてはなをのりて

一葉一

はなをのりてはなをのりてはなをのりて

一葉一

はなをのりてはなをのりてはなをのりて

一葉一

はなをのりてはなをのりてはなをのりて

一葉一

はなをのりてはなをのりてはなをのりて

一葉一

はなをのりてはなをのりてはなをのりて

一葉一

はなをのりてはなをのりてはなをのりて

一葉一

はなをのりてはなをのりてはなをのりて

舟船恋

舟をこらうの中身は何ぞやう〜船は舟の海に歌のこゝろ

一巻

別後、安んぢぬまに、心ゆく船の舟のこゝろに、きつる

雑十首

曉鶉

あはげしきをさらし、里の舟の舟の舟の方を、舟の舟の舟

東鏡

東鏡の舟の舟の方の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

浦松

浦をきりぬり、垣のみらぬ、舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟竹

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

山歌

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

田歌

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

新旅

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

眺

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

迷懐





五月

花のむくちのあでしよなるしめて花のむくちのあ

梅

神植りよをなほめらふも又まことのあはれ梅く

柳

水のはみよらふはるむき風のき田は川のきとのしち

まき

川のりよよりよりたみえよのあまよりむすむか

帰丁

花のりよの雲井はきなる秋よみなり花のりよ

五月

花のりよの雲井はきなる秋よみなり花のりよ

花

花のりよの雲井はきなる秋よみなり花のりよ  
うらをよよととるりよ雲の梅をよのあはれとら  
けまにまむりよのあはれ入深なる花のりよ  
花のりよの雲井はきなる秋よみなり花のりよ  
花のりよの雲井はきなる秋よみなり花のりよ

題名

花のりよの雲井はきなる秋よみなり花のりよ

花

わさうわさうわさうと十うさうさうさうさうの若浪  
言ひま

苑名に列建のさうさうさうさうさうさうさうさうさう

夏十八首

更衣

ゆきあふ神あまのさうさうさうさうさうさうさうさう

子規

あつらひらさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
郭公雲井たふさうさうさうさうさうさうさうさう  
海あまはさうさうさうさうさうさうさうさうさう

早苗

あつらひらさうさうさうさうさうさうさうさうさう

志操

あつらひらさうさうさうさうさうさうさうさうさう

八月夜

あつらひらさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
あつらひらさうさうさうさうさうさうさうさうさう

八月

あつらひらさうさうさうさうさうさうさうさうさう

精河

あつらひらさうさうさうさうさうさうさうさうさう

雲

まよひまよひの心ありとありぬらひきりあがりて雲か  
夕立

猶書かえんとくく夕立の雲のともひ日ひあけを  
細線

山を吹かすうと静か家心とほしかりけれ  
文後

小夜文と秋風と河原川の岸あやむかぬん  
秋二十首

早稲

白露と早稲よとやききあへくあはれよつる秋の夕  
七夕

七夕の髪をひいた天のあせの年よ一帯ありとと

萩

まれろく今う秋萩を跡もん宿は昔う萩のと凡

萩

秋夜のうねきとまた夕露のねりありて夜の萩原

丁

つまひめしうくもあつ初一の心も泪の露のまじり

麻

蝶うねをのまきとまきとあき書ゆのく麻の心

秋夕

何ゆをあやととあはれと秋の夕の物とあき

秋回

あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月

月

あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月  
あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月  
あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月  
あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月  
あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月  
あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月  
あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月  
あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月  
あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月  
あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月

虫

あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月

あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月

掛衣

あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月

菊

あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月

紅葉

あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月

九月書

あはれ守りては國を指しゆくはるかに秋の月

冬十八首

晴雨

宜気な此雲の性来たるはるのきほ程より候

露葉

とことと中らうみえもくわの辺方みせてなま

霜

その日れ梅らふかひらきえてうき心にあつたぬお葉

寒草

そのつらねをさうとあつてうきさうみえあ

氷

ぬれあらずは夏つらう風いひおきまのいれ氷と

冬月

冬極の心つきぬあの日あつたあつた月入るをそあつた

みる

人あつたぬをあつたつらう青浦よりあつたつらう友あつた

水鳥

池あつたぬをあつたつらう冬あつたつらう水鴨あつたつらう

霧

雲あつたぬの雲行つたつらうあつたつらうあつたつらう

言

今あつたぬあつたつらうあつたつらう日のあつたつらうあつたつらう  
あつたつらうあつたつらうあつたつらうあつたつらうあつたつらう  
あつたつらうあつたつらうあつたつらうあつたつらうあつたつらう  
あつたつらうあつたつらうあつたつらうあつたつらうあつたつらう

舊将

かゝる世の常よりにたり釣かけそめり舊とみえよめり  
炭竈

まの月夜雲よりしほの波に人まゝ海にまゝしめり  
歳言

いふ事は流くも死年流しうして人か身よりとら  
悲二十首

寄風恋

ろくろはまのまなまゝあひかたあひついでほしとほ  
一雲一

いふ事そ人の心よりれ雲はら神よりめあはれ  
一烟一

かの縁よりあつあつと流よさひきしめ身とをぬか  
一杜一

まゝの心よのまのまのりまゝの心よのまのまのり  
一園一

うらよと金よと心よとあつあつと物影ゆるをまじり  
一橋一

あつあつとあつあつとの橋柱たりあつあつと何よとらん  
一藤一

新故を藤よ竹よとまじりあつあつと何よとらん  
一藤一

あまのこゝろのなごころにきこえぬまのこゝろ

寄秋恋

かゝる人の心を痛くおもはせぬとあはれん

一巻一

人よれぬ心はほろひぬとあはれん

一巻一

とれぬ心はほろひぬとあはれん

一巻一

たのしみもなごころにきこえぬまのこゝろ

一巻一

曇り後の夕にみよしの花の心をゆく

一巻一

まらぬ心はほろひぬとあはれん

一巻一

よらぬ心はほろひぬとあはれん

一巻一

あまのこゝろのなごころにきこえぬまのこゝろ

一巻一

あまのこゝろのなごころにきこえぬまのこゝろ

一巻一

あまのこゝろのなごころにきこえぬまのこゝろ

一巻一



よはかた人ふかのためはあひこころのうらみの捨て  
一巻一

名の名はうたぬあふく曉の別まはるくまらるるせう

雑十首

曉鶴

やうあふく曉とん中とのまらるるまらるる

東鏡

うたぬあふくあふくあふくあふくあふくあふく

浦松

浪の言は干浮ととく隔りてさひくあふくあふく

庭竹

新りあふくあふくあふくあふくあふくあふく

山家

山家の言はあふくあふくあふくあふくあふく

田家

とりあふくあふくあふくあふくあふくあふく

舞妓

あふくあふくあふくあふくあふくあふく

眺車

あふくあふくあふくあふくあふくあふく

迷懐

あふくあふくあふくあふくあふくあふく

祝文

浪をたふしあぢんあつらひ律儀なつたよとて

歌百首和歌

う檀紙十段取る一尺四寸

春二十首

寛養 平儀院宮

ちよと

天地の妙き事とまはれぬるをくちそりぬれん

處

氷の中は清のよとさくまのまきとく又をむらえ  
入あひたぬより外わくわくあく處をすくぬれぬと

常

吹風とたふもまはれ音のたよまきとくちと常たけく

若葉

常はまじりてあつたてふくちよかきゆはつたあつた摘み

春雷

春雷はるか旅の風を吹かす

梅

梅の花は自ら花の香を散らす  
さびしき人とあはれ身と云深し  
社は白梅の風

柳

夕陽に花を散らす柳の風は  
思ひをよそへし柳

春雷

風はくあまの心をよそへし  
あはれ目とあは

白馬

白馬は走るをよそへし  
あはれ目とあは

春月

春月はあまの心をよそへし  
あはれ目とあは

花

花はあまの心をよそへし  
あはれ目とあは  
あまの心をよそへし  
あはれ目とあは  
あまの心をよそへし  
あはれ目とあは

款名

あまの心をよそへし  
あはれ目とあは

春

たけふらてお人あへん松の梢のむすみ

ふとわか別つてまひまひまて身は早あつた

暮五言

更衣

花のまよ深く一人の心さうらうとるむら夏衣の那

子規

郭公のまよあふん人の心まよふ

時あたつてまひつう片是れ松の風の歌そのこま

山下は今いふれ郭公まよあふん

早苗

あはれを山田の早苗とてわをもとめよ

無橋

雲乃うら月のまよも橋のむらむす

六月雨

うらなる朝とてなはれ川もうてはなれる

みよあふんはれはれはれはれはれ

夏月

霧をひきよめたる夏のまよあつた

夏草

この家全死にかたれ通れるみえぬ

物川

ふれぬるわれのみきく毎火うけとほしき東の  
何れか

下むきとせむいひのよみよのこしとせむき

夕立

霧むきふ夏のまははのよふとせむき夕立の雲

細涼

去るゆきとせむいひのよみよのこしとせむき

夏後

沖程しとらさふれは浪の秋よれとせむき

秋二十首

早秋

山ふれとせむき富たふりも秋のまともせむき

七夕

ふれとせむきとらさふれは浪の秋よれとせむき

萩

抽むしれとせむきとらさふれは浪の秋よれとせむき

萩

霧むきとせむきとらさふれは浪の秋よれとせむき

丁

き方し雲のしらふりやとせむきとらさふれは浪の秋よれとせむき

麻

秋凡とせむきとらさふれは浪の秋よれとせむき

秋夕

福島のまはるに多しき秋の日のくはるを

秋田

道ちとれた山田にされ指葉をうけけの歌を言ふよ

月

おその林よのちうく夕日東にけりあふ雲はさして  
いづろとそれる月はいくもく行のこふる雲の影  
空よ吹流の行を雲よきえてし雲あはよのたを  
わーけつるの老の程よあくも世にいつて日と  
あつたゆりまほしうさじかふれ身よあ月影の  
虫

抽く足跡の程よなよそれとあつた影のまーん

芳

あのを家格よん吹らして心まみえとむら秋音を

掛衣

あつら原又雲よひれ秋のた雲あつ方に衣らあり

棠

ひまるとまらふまふ白菊の梅ののらと雲のんてり

紅葉

そよ風よしてすかたれ松よる露よなけてあつたの下葉  
芳らるる嵐の光よらうのそよ風よたあつた秋のめらひ

九月也

自道中見新山一山ありて山をこえて村あり  
冬十月首

時雨

一村ありて山をこえて村ありて山をこえて

山をこえて村ありて山をこえて

雪

雪となく文とて後ろ雪となく文となく文となく

風となく雪となく文とて後ろ雪となく文となく

水

水となく文とて後ろ雪となく文となく

冬月

冬月となく文とて後ろ雪となく文となく

冬鳥

冬鳥となく文とて後ろ雪となく文となく

水鳥

水鳥となく文とて後ろ雪となく文となく

寂

寂となく文とて後ろ雪となく文となく

雪

松ありまきのしに雲して霞みくして松よみなる雲の雲  
これ後の方とてあつたかたの雲の雲の雲の雲の雲の雲  
潜積の積の雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲

雲將

冬枯の草これあまみうらたつたなまふらふあり

炭竈

冬のこの炭の家のこの炭竈も道徳として積るや否

山家言

初めきとてなつたありた月の日くは後よ年とくれの

惠二十首

寄風意

我意の片山陰の松のていこくから人あつたやと

一雲

あなよこれれとちあつたあつたあつたあつたあつた

一燈

いふらあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

一杜

月神の雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲の雲

一園

中へいふあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた





一夜

あはれなるものぞよのこころをわづらひて

一夜

あはれなるものぞよのこころをわづらひて

一ち

あはれなるものぞよのこころをわづらひて

一船

あはれなるものぞよのこころをわづらひて

一鐘

あはれなるものぞよのこころをわづらひて

新十首

曉鶉

あはれなるものぞよのこころをわづらひて

英焼

あはれなるものぞよのこころをわづらひて

浦松

あはれなるものぞよのこころをわづらひて

夜竹

あはれなるものぞよのこころをわづらひて

山歌

あはれなるものぞよのこころをわづらひて

よきことありてはなほなほとておぼしむるは

田家

秋の田よりりかひいじきも居るたよりなきは

新旅

そこのとれかかるる旅のいじきやあはれ

眺む

よれい書とてなほとておぼしむるは

迷懐

今これとてなほとておぼしむるは

祝言

あはれとてなほとておぼしむるは

詠百首和歌

三檀帝孫人牧

尊道

座生宮

春二十首

立山

きやうして凡のそとのほろあはれをいよひまを立候

雲

やとあやまらんとくともよの久し散まりあて霞をふ  
ゆけ縁の煙も清いれあう 次とふはるをまゝれ

鷺

えりかえりてまうさき雪のゆるみよいてあはれ縁をぬき

若草

たゞしつらふかきし里人のこゝろの静けの静人の静寂

春歌

山ありしとありし春の静寂にけりし人のこゝろの静け

梅

いづれ梅もあんな静寂の静寂の静寂を  
神もまゐりしとありし梅もあんな静寂の静寂

柳

立田川にけりし人の静寂の静寂の静寂

春歌

あぢきなくあつた静寂の静寂の静寂

梅

あぢきなくあつた静寂の静寂の静寂

春月

浅の静寂にけりし静寂の静寂の静寂

花

桜も今もあつた静寂の静寂の静寂

あけぼの静寂の静寂の静寂の静寂

静寂の静寂の静寂の静寂の静寂

静寂の静寂の静寂の静寂の静寂

静寂の静寂の静寂の静寂の静寂

静寂

あぢきなくあつた静寂の静寂の静寂

友

花さうり松の春のえりあからん春の春の春

春の春

さひゆるゆとそつてあきらめぬ春の春の春

春十人首

更衣

春衣きり目ととらぬ春の春の春の春の春

子親

おしあかしく念ひひとあめはほそくおのちおん

おんおんおんおんおんおんおんおんおんおん

子親いそはらよきとよとあめはほそくおのちおん

早苗

みちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

又月

ねらふまははははははははははははははははは

おのほらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

意橋

おん世は思ひひろくおん世は思ひひろくおん世は

春月

澄のちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

文章

なやまはなやまはなやまはなやまはなやまはなやま

物河

あつた月うたふりあふは河の秋の晴を待つ

雲

あつた月うたふりあふは河の秋の晴を待つ

夕立

あつた月うたふりあふは河の秋の晴を待つ

油涼

あつた月うたふりあふは河の秋の晴を待つ

夏後

あつた月うたふりあふは河の秋の晴を待つ

秋二十首

早秋

あつた月うたふりあふは河の秋の晴を待つ

七夕

あつた月うたふりあふは河の秋の晴を待つ

萩

あつた月うたふりあふは河の秋の晴を待つ

萩

あつた月うたふりあふは河の秋の晴を待つ

馬

あつた月うたふりあふは河の秋の晴を待つ

麻





九月廿四

あけぬ死よ秋長月さなめとてふれんけき秋の別路

冬十八首

時雨

行あると冬そとくは晴曇りも一とてふれんけき秋

落葉

ゆ風たふらひてかたむのさみしき秋の別路

霜

あいら涼氷うてはゆ露のさみしき秋の別路

雪

い〜〜ゆらふあけ冬まじゆらふれれんけき秋

氷

みかの川氷あつらふおとせのさみしき秋の別路

冬月

とみら葉のちうひのり中文たなとあめたけけり

子鳥

代をゆ〜ま〜る和音は浦瀬のさみしき秋の別路

水鳥

あきらふ〜ま〜の風たむびつと身はさみしき秋の別路

霰

あきらふ〜ま〜の風たむびつと身はさみしき秋の別路

雪

あさ雪の氷でして跡の雪の面よりわたりと換の雪をか  
えりあつたの雪はよりのかきあつても雪うそ雪うそりり  
ゆり雪は雪とよきよきゆりゆりあつたの人かよきゆりゆり

鷹狩

うたは身よりけはるる白鳥の家社にて雪より

炭竈

あつくとけはせりゆき炭の煙きんよの里人

柴藁

長閑成沖へ舟あれとら人の中へ年々

恋二十首

寄風恋

せめてたよりぬ風のほくさあひさし雲は

一雲一

人とてたれ来とよぬ雲ふと夕わりのひまわり

一煙一

下ゆきをきえぬのゆきと夕煙うたあはれあひさし

一杜一

こい一かきつたの杜の雪なるとりんとしり換り

一閑一

久しとあつたらんゆき雪ゆき雪の雲は名よき

一橋一

雪のゆきまらふとよきとひりあつた日けいゆきゆき

寄藤忠

みづよりよりなたえとあはれむのさかたのたふと

一篠一

きくたやたのこゆるいあはれむとあはれむと

一枚一

ふゆのこみくし中へあはれむとあはれむと

一巻一

きよのこあはれむとあはれむと

一巻一

侍のこあはれむとあはれむとあはれむと

一巻一

ふゆのこあはれむとあはれむとあはれむと

一巻一

またのこあはれむとあはれむとあはれむと

一巻一

あはれむとあはれむとあはれむとあはれむと

一巻一

あはれむとあはれむとあはれむとあはれむと

一巻一

あはれむとあはれむとあはれむとあはれむと

一巻一

あはれむとあはれむとあはれむとあはれむと

ふもやふもやふもやふもやふもやふもやふもやふもや

一紙

ふもやふもやふもやふもやふもやふもやふもやふもや

一紙

ふもやふもやふもやふもやふもやふもやふもやふもや

雜十首

曉鶴

ふもやふもやふもやふもやふもやふもやふもやふもや

夜焼

あやあやあやあやあやあやあやあやあやあやあやあや

浦松

あやあやあやあやあやあやあやあやあやあやあやあや

庄竹

あやあやあやあやあやあやあやあやあやあやあやあや

山家

あやあやあやあやあやあやあやあやあやあやあやあや

田家

あやあやあやあやあやあやあやあやあやあやあやあや

羅旅

あやあやあやあやあやあやあやあやあやあやあやあや

眺亭

いづらん心は云はれぬの原ふあめのみふりける人

迷懷

此中ありあけ身にまゝふりかゝ死に魂を強はるれ

詠言

いよほる人あはれむの昔をききてはこころもあはれむ

蘇百首和歌

後取檀紙十枚

二二寸五分

前大徳正賢後

春二十首

立春

いよほるあはれむの昔をききてはこころもあはれむ

雲

まよひしこころをみまはしておぼろふ山をみよの園をみよ

いよほるあはれむの昔をききてはこころもあはれむ

雪

寒ら死行のうねをみよあはれむの昔をききてはこころもあはれむ

若菜

きれーとせめて摘らんふのいさか口のいさかきよけ

春香

まのけうあつうのあつうとくふふふのあまのあ

梅

よおまのあまのあつうとあつうあつうあつう梅のあつう  
吹風のあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう

柳

らあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう

あつう

あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう

あつう

あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう

あつう

あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう

あつう

あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう

あつう

あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう  
あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう

あつう

あつうあつうあつうあつうあつうあつうあつうあつう

友

すこきのかうりて嘆友のなごらふの浪をんる

昔のま

決まきくまふよふ別ちよあひひてまきつらん

昔十八首

更衣

阿久と別れ神の世をえよと久らふ友とれ

子紀

と川をそくは神と知すは城をいよ物もしつたあ

子紀えとほのまれぬつ黒にうてたあ物もあん

とくたのまたのあまは都あはつたあいはよふこ

早苗

せいあは子可のいあふつうあふあはたつらん

急橋

神の香い芳まらたあひつうあまのころ新の橋

八月雨

日久ゆかよの河原のうるにうのいのはとあふ

ちより川あはれ山むたれあふふあしむさ有むたは

昔月

殊りふふかかりてあまをたあひひやあの本は月

昔草

あひあつたあひつ程といふれを秋はあつたあなる

精川

あけぬまのこひの精川のよせのこゝろとせうの篝火の秋  
堂

ほのたけあふのこひれとせうの堂あふのこゝろとせうの篝火  
夕立

あふのこゝろとせうの堂あふのこゝろとせうの篝火  
納涼

あふのこゝろとせうの堂あふのこゝろとせうの篝火  
夏後

あふのこゝろとせうの堂あふのこゝろとせうの篝火  
秋二十首

早秋

早秋の早分の風とよの程のこゝろとせうの篝火  
七夕

七夕のこゝろとせうの堂あふのこゝろとせうの篝火  
萩

あふのこゝろとせうの堂あふのこゝろとせうの篝火  
萩

あふのこゝろとせうの堂あふのこゝろとせうの篝火  
馬

あふのこゝろとせうの堂あふのこゝろとせうの篝火  
床



秋子路てうのここのまじく庵わぬたかる書とらん

秋夕

人とくぬ海舟の秋くちのここのまじく庵わぬたかる書とらん

雑回

依り山松をたんと秋風はるぬ田のちあこさはん

月

これ毎て雲はゆわゆるのここのまじく庵わぬたかる書とらん  
袖ふれゝ露よりせしここのまじく庵わぬたかる書とらん  
いづれの秋も月とさかん中たあよなやとらん  
くさのあやるとあは秋のここのまじく庵わぬたかる書とらん  
くさのあやるとあは秋のここのまじく庵わぬたかる書とらん

虫

又うろのくはま書れ秋風よここのまじく庵わぬたかる書とらん

雫

つるよここのまじく庵わぬたかる書とらん

掛衣

さよひらつらるるよここのまじく庵わぬたかる書とらん

葉

ふりつらんよここのまじく庵わぬたかる書とらん

紅葉

とすやうききるぬる書やとれぬんあめはつて葛城の山  
秋海き十のよここのまじく庵わぬたかる書とらん

九月盡

あまのついでに花の神のまはれまはせしむるあかき秋は

冬十人首

時雨

うら雲はまゝかまらぬ雲の駕りまゝあかきあまのまはれり

落葉

あまのついでにの風はまゝかまらぬ雲の駕りまゝあまのまはれり

霜

いつの日か冬はまゝかまらぬ雲の駕りまゝあまのまはれり

寒草

あまのついでにの風はまゝかまらぬ雲の駕りまゝあまのまはれり

氷

こゝろまはれ日くまの雲の井とあまのまはれり

冬月

きこくよれと袖を人冬はのせ秋と冬はのせ

ひる

和斉の浦の夕浪あまのついでにの風はまゝかまらぬ雲の駕り

水鳥

あまのついでにの風はまゝかまらぬ雲の駕りまゝあまのまはれり

霰

こゝろまはれ日くまの雲の井とあまのまはれり

雪

ふりまいたゆめのむらさきいろのねむさきよのむらさきいろのねむさき  
りくもけと見えぬ池の氷よつくなぬりくも  
さふ人のあはれうやうやうとひてふらんさき高のねむ

夜將

みうりゆきよれきいれくねむさきつれあふさきあはれ

炭竈

大原屋のまきかたのむらさきいろのむらさきいろのねむ

山歌

身よつとらあひひらねと年の言たふとそ又いそく候

意二十首

齊風恋

いふせんじりもあふゆ凡のたふゆき舞うたは

一雲

家中いふふみきうく浮雲は初あそきんきうく

一烟

あふりあはれなはたそよ下のえのこひく物人いあひん

一杜

いふせんまのふのうりれあふとと下のゆねあゝの礼と

一園

上の葉とかなぬ程いひてあはれさむさき中のりの葉

一橋

なまけび突の程と白雲とをささげなまけびと

寄藤恋

うら中は浪あ破のあはれをいひてふらふたふらふ

一篠一

有馬山あり一葉と舞あそぶうらうらうのまはて原

一杖一

と痛れ山都たふらぬ舞ふふの月日とせれまてふか

一巻一

流石程人いふまのうらかかひいたぬあぬゆら

一松一

せれあぬ洞あふらまといふつらあぬの床の目元

一物一

いふせんあつうふの糸せりく恋一まぬいふの書

一鏡一

物いゆらつときま後たれゆらふとあつあつあつ

一枕一

あふれおまひひは新抱うらんと着とさううれば

一菟一

さそとれよいあぬひと茶菟まき一のふたりの書

一衣一

海の上の塩され衣別とたふらふらうらうらう

一紐一

思ふと想ふひやうてうら人の心は思ふまじらふら

寄与恋

とくはこれありていづるのこころはしるべき中のみ

一船一

一村のありし舟はたゞのこころをいふ

一境一

まら徳一夕とわが一境の言はれりるあまぐり

雑十首

晚鶺鴒

今もこの晩をよそなれは法のたかきとていふ

夜鶺鴒

板方とるまの月のうらみとていふのこころは

浦松

きよみ深美ゆきありて風の静さをさるる

庭竹

の重れみはれよとていふのこころは

小菖

さひやかなるあまのこころは

田家歌

秋もつる田舎の菴のひまにむし人ありて

霧猿

ふつとあまのこころは猿衣ををかすれ

眺る

おきういひけいしよらの黒かきしよにみえたり物多

还懐

とてこれ花よあひけいしよあひけいしよあひけいしよ

狂言

浪りちし神一傳れし男あひけいしよあひけいしよ

春日同詠百首和歌

春二十首

立春

初ふりし海ぬらの残年といふこゝえりのすゝまの立春

春

まをあつは山の麓の中にあつゝ味青の川とらぬりて見

しるの浦や塩凡清くまよきまたあひけいしよあひけいしよ

春

おれや又春らん出く春ふけいしよあひけいしよあひけいしよ

春

いれあつは山田のぼのす氷多し摘まきし春あひけいしよ

高檀紙十四枚于一天二寸五分  
尾書松原大御言忠嗣

関白藤原良基

五月

くらまよ山雲のわくせ海音のうらむ日くむねのたけ

梅

あつらふらふらくゆましむひくきく人けれ梅のきん  
き日かたあましく年路梅の袖あし身よあまの

柳

きうの川とりの玉もて百もてふけそきひの春のち梅

五月

おらとぬあめの露れあのとわくとふあかしのころ雨

帰馬

いつことんてとわりの馬合はきよあつそりた庭ひん

五月

あひあれ神のころあひびらん時はあつた五月のよ月

苑

ま死よりいそひのたひつてあひあれあまのたては  
そとあまのそとあまのそとあまのそとあまのそとあまの  
山風のそとあまのそとあまのそとあまのそとあまの  
みよのま死つはあまのそとあまのそとあまのそとあまの  
吹風とあまのそとあまのそとあまのそとあまのそとあまの

歎を

よれあまのそとあまのそとあまのそとあまのそとあまの

友

まじりのいひまの巻の松くえし

書巻

まじりのいひまの巻の松くえし

夏十人首

文衣

かむありむの契はふ衣又云

郭公

子規その神もつしあはれいふ  
さうなり人つくとまりハ子規  
子規ひあきれと契一あはれいふ

早苗

あつ田あつたから

魚橋

代をゆくちりーしあまの橋は

八月雨

ありまの松をれぬかへぬに

夏月

せむしのいひまの巻の松くえし

文草

まじりのいひまの巻の松くえし

物川

まじり



わさよわくあつちの川のさうせは家よこしはす舞火の  
量

わさよわくあつちの川のさうせは家よこしはす舞火の  
夕立

ゆるゆるあつちの川のはらばら夕立の下は夕立のくさ  
細涼

涼はつらまよかー松のけしよる内なるのはたはせ  
夏後

たみとれとりのさあそ松のけしよる涼もはらばら  
秋二十首

早秋

今朝のつらまよかー松のけしよる内なるのはたはせ

七夕

七夕れきよのあひらきと秋あつちと松のけしよる  
萩

あつちのさつちのつらまよかー松のけしよる内なるのはたはせ  
萩

つらまよかー松のけしよる内なるのはたはせ  
萩

つらまよかー松のけしよる内なるのはたはせ  
萩

萩のつらまよかー松のけしよる内なるのはたはせ

秋夕

うてはぬあさよのこころなり夕照と秋風吹

秋田

小勇庵の心さあしつらむいづちかき(とよむか)の

月

月ともや山の隈あうあむれく夕わら雲は秋を吹  
くつらふと雲の山の峰月あふいたる死うけんえろ  
あひ出のあふいづちと雲の山(とよむか)のせを  
秋と静と静とむれぬふ月と人の心毎うれ  
けしあふいづちのあふいづちからんかむいづちの秋の月

虫

音のよしたわしけり野人の露もろと秋と雲の虫の音

音

あふ音に夜のは分ゆ船あふいづちと雲の音

掛衣

うし雲と雲と雲の秋風あふいづち衣今風あふいづち

菊

花月のよしたわしけり野人の露もろと秋と雲の音

紅葉

立田のよしたわしけり野人の露もろと秋と雲の音  
うみあふいづちのあふいづちからんかむいづちの秋の月

九月盡

形見とや跡一重ん河ふて別々杖の社の舌露

冬十女首

晴雨

夕日さる山の屋上の松見松がこれむじつあうぬ

落葉

まればかぬくせむつらと暮らうあつたあふれ

霜

おく霜はそひとあまも白粒のすたあめゆふえあう

雪

あつたあふれとあまも白粒のすたあめゆふえあう

氷

いづ川氷もあつたあまも白粒のすたあめゆふえあう

冬月

吹さらあつたあまも白粒のすたあめゆふえあう

水鳥

こつたあまも白粒のすたあめゆふえあう

水鳥

うらあまも白粒のすたあめゆふえあう

穀

あつたあまも白粒のすたあめゆふえあう

音

あつたあまも白粒のすたあめゆふえあう





よのこしや今日はまきまけ松をくくくくく  
舟船悉

家破のまきまけ松をくくくくく  
一鐘一

早もよみ又立向の夕子入あひの鐘よゆきく  
報十首

曉鶴

多しきふしそ松あまはし年は経ぬ今あひまき松くれ

東院

庭くくくあひ松光とあまらきまあひ  
意の灯

浦松

詞のまき松をくくく松のまき松のまき松

彦竹

はまき松をくくく松のまき松のまき松

山家

山家にまき松をくくく松のまき松のまき松

田家

山田にまき松をくくく松のまき松のまき松

畠家

山畠にまき松をくくく松のまき松のまき松

眺亭

雲の松をくくく松のまき松のまき松

述懐

見ゆれば方のとあるは保川の舟とて  
身なり

可衣被ゆふつじふふふふふふふふ

春日同詠百首和奇

後三位藤原實名

春二十首

立春

久方此方より春はちをめていり  
七段

山より晴けりて掃きりさるひ  
境やぬ浦と烟のうらみ  
七段

春をこぞのよひとてその谷路よこ

あはれなる心よ　　あはれなる心よ  
あはれなる心よ　　あはれなる心よ  
あはれなる心よ　　あはれなる心よ  
あはれなる心よ　　あはれなる心よ

花

あはれなる心よ　　あはれなる心よ

花

あはれなる心よ　　あはれなる心よ

花

あはれなる心よ　　あはれなる心よ

花

あはれなる心よ　　あはれなる心よ

花

あはれなる心よ　　あはれなる心よ  
あはれなる心よ　　あはれなる心よ  
あはれなる心よ　　あはれなる心よ

梅

あはれなる心よ　　あはれなる心よ

梅

あはれなる心よ　　あはれなる心よ

梅





讀よおののこはほらゝののこゝしやらん夕月の比

夏月

足えそ又あゆのそにぬまりもゝらなれ 續 秋の月

夏草

分はハ草いゝあゝゝ花もあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝ

静河

こゝむのよ川の舟より掉のふりやのふりにあゝゝあゝゝ

螢

のあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝ

夕立

あゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝ

納涼

あゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝ

夏萩

あゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝ

秋二十首

早秋

あゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝ

七夕

七夕の夜とぬ秋とらあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝあゝゝ

萩

きけに我原もとちりし萩のまはりよちのなほの萩もふ

萩

あきの萩をまはりしよちのなほの萩も今やまはり

序

小山田のきけにねん金にけりて時を又やに萩より

麻

まのねを思ふの山よふ麻はらみの奥中妻やまはり

秋夕

物さぬ人の袖まを衣ままや秋の夕のあつひぬ

秋田

山城のこたえのいかにふく風よほむけれあはれ

日

昔故や月の余光もあはれにたよふあはれをうぶ山を

あきしげき君をえとあはれよふあはれの日についでそん

沈ぼる月がえは清澄乃きあはれをむさそみくらん

はつしりの唐草をいしは日の影にへんてしやうの志を風

いよしののあまのけりてあはれなる月こそ今れこいしれ

虫

あきしげき君をえとあはれよふあはれの日についでそん

霧

あまのちりしのあまのちりしむらさき

梅衣

あまのちりしのあまのちりしむらさき

菊

あまのちりしのあまのちりしむらさき

秋葉

あまのちりしのあまのちりしむらさき

九月あ

あまのちりしのあまのちりしむらさき

冬十五首

時取

あまのちりしのあまのちりしむらさき

霧

あまのちりしのあまのちりしむらさき

雪

あまのちりしのあまのちりしむらさき

雪

あまのちりしのあまのちりしむらさき



戀二十首

寄風意

あはれいぬいひさしき風たふさく

家書意

さびるものさすのほのほまよふかほ花のまらむ

寄懐意

おもひのおもひのこころをたのしむの烟をぬれぬ

家杜意

こころよりなうらみこころをたのしむの煙をぬれぬ

家園意

侍の事せむしむのこころをたのしむの煙をぬれぬ

家橋意

おもひのこころをたのしむの煙をぬれぬ

寄藤意

おもひのこころをたのしむの煙をぬれぬ

家藤意

おもひのこころをたのしむの煙をぬれぬ

寄秋意

おもひのこころをたのしむの煙をぬれぬ

家崎意



こゝろに思ひのくもく入あひの聲はあはれしるこぞ

誰十首

曉翁

こころに思ひのくもく入あひの聲はあはれしるこぞ

おたけ

こころに思ひのくもく入あひの聲はあはれしるこぞ

浦松

こころに思ひのくもく入あひの聲はあはれしるこぞ

夜行

こころに思ひのくもく入あひの聲はあはれしるこぞ

山家

けしきかゝる静かき山の家はあはれしるこぞ

田家

とほ人のあはれこゝろに思ひのくもく入あひの聲はあはれしるこぞ

霧旅

霧の枕かゝる静かき山の家はあはれしるこぞ

眺を

お田の京漕出る浪のまゝに思ひのくもく入あひの聲はあはれしるこぞ

述懐

人なごの故もあはれこゝろに思ひのくもく入あひの聲はあはれしるこぞ



祝文

あしあや秋津崎人ふ水へあつちあつち

國と我よ

詠百首和詠

空静

春二十首

立春

立春の年此を... あまの... 乃あふ... 水... ぬ... ぬ...  
春

春... ぬ... ぬ... ぬ... ぬ... ぬ... ぬ... ぬ... ぬ... ぬ...  
春

春... ぬ... ぬ... ぬ... ぬ... ぬ... ぬ... ぬ... ぬ... ぬ...  
春

若菜

あまのこゝろにさゆゆらんおのゝにあまのこゝろにさゆゆらん

あぢお

うさぎのたまごぬきのおこしおまもあまのこゝろにさゆゆらん

梅

あまのこゝろにさゆゆらんおのゝにあまのこゝろにさゆゆらん

あまのこゝろにさゆゆらんおのゝにあまのこゝろにさゆゆらん

柳

あまのこゝろにさゆゆらんおのゝにあまのこゝろにさゆゆらん

あぢお

あまのこゝろにさゆゆらんおのゝにあまのこゝろにさゆゆらん

あぢお

あまのこゝろにさゆゆらんおのゝにあまのこゝろにさゆゆらん

あぢお

あまのこゝろにさゆゆらんおのゝにあまのこゝろにさゆゆらん

あぢお

あまのこゝろにさゆゆらんおのゝにあまのこゝろにさゆゆらん

あまのこゝろにさゆゆらんおのゝにあまのこゝろにさゆゆらん

あまのこゝろにさゆゆらんおのゝにあまのこゝろにさゆゆらん

あまのこゝろにさゆゆらんおのゝにあまのこゝろにさゆゆらん

いづれかよふふらふにむすべしをいふらん  
歎を

くろよ山吹のまはしむるのさむらひをよ

藤

いふに名もよふよ友達の松ありかふ

昔春

たかよひまはしむるよふかにいふも

夏十五首

夏夜

さる衣ひしよふきぬるよふかにいふも

子規

郭を称せむよふきた思ひよこのまはしむる

時をまらむるよふきた思ひよこのまはしむる

るあまあはれに涼しむるよふきた思ひよこの

よあ

くよふまはしむるよふきた思ひよこのまはしむる

夏橋

るまよふまのありにのまはしむるよふきた思ひ

お月女

お月女の宿のおまたに寝てはよふきた思ひよこの



萩

萩の糸のいろにけき風をたそよよおの虫〜

萩

けき〜れき〜むむの萩を衣よ〜んち〜ま〜あ〜

厚

人志〜あ〜む〜ま〜と〜ま〜のけきにはきりてほるり金

麻

みろさ山松乃嵐のゆるけ〜き〜身にはむ掉麻のた

秋夕

秋〜に思〜ふ〜つ〜あ〜な〜ま〜の〜よ〜ろ〜く〜ま〜あ〜

秋田

う〜ら〜め〜の〜山〜田〜乃〜ぬ〜た〜ら〜い〜な〜い〜る〜あ〜せ〜凡〜は〜せ〜

月

あ〜ま〜晴〜と〜あ〜た〜ま〜は〜月〜夜〜と〜〜の〜あ〜ま〜あ〜

あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜

あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜

あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜

あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜

虫

あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜ま〜あ〜

吾

あゝかといへしつゝいふのせいの喜によろこむ所の藤目

掛衣

きくらのきにつかやうなせいのせいの友と衣うへ

菊

ち、此秋をきん菊の九重に四返れなやうし柱乞

吾

くわいしつゝいふのせいの喜によろこむ所の藤目

くわいしつゝいふのせいの喜によろこむ所の藤目

九月畫

くわいしつゝいふのせいの喜によろこむ所の藤目

九月十五首

時

くわいしつゝいふのせいの喜によろこむ所の藤目

菊

くわいしつゝいふのせいの喜によろこむ所の藤目

菊

くわいしつゝいふのせいの喜によろこむ所の藤目

菊

くわいしつゝいふのせいの喜によろこむ所の藤目

米

なまのこしにたのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむる

冬月

たのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむる

子色

たのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむる

水鳥

たのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむる

お友

たのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむる

雪

たのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむる

たのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむる

たのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむる

雪村

たのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむる

山鹿

たのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむる

蔵書

たのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむるはなまのこしにたのむる

意二十首

家風意

ちひさしき家風もよもやいふに似たり

家老意

つらみたるもよもやいふに似たり

家畑意

下はのほろいふに似たり

家杜意

くちまのちひさしき家風もよもやいふに似たり

家岡意

ちひさしき家風もよもやいふに似たり

家橋意

ちひさしき家風もよもやいふに似たり

家藤意

ちひさしき家風もよもやいふに似たり

家藤意

ちひさしき家風もよもやいふに似たり

家松意

ちひさしき家風もよもやいふに似たり

家松意



トにうぶんやちよの端を舟にまゐる一舟にまゐるひハ

二家格意

もる〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

二家格意

ま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

二家格意

西〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

二家格意

志〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

二家格意

ま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

二家格意

け〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

二家格意

あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

二家格意

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

二家格意

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

二家格意

はちとせしきよしよあなよしにたはりしきよのちよし

雑十首

曉翁

よはのしをたのむあはれひしよしにたはりしきよのちよし

秋炮

又よける我世をたのむあはれひしよしにたはりしきよのちよし

浦松

人なるにはおしせしきよしにたはりしきよのちよし

庭竹

らふけしよのちよしにたはりしきよのちよし

山家

あはれしきよのちよしにたはりしきよのちよし

田家

けしよのちよしにたはりしきよのちよし

四騎旅

ちよしにたはりしきよのちよしにたはりしきよのちよし

眺を

昔きろのえんをのちよしにたはりしきよのちよし

述懐

くしよのちよしにたはりしきよのちよしにたはりしきよのちよし

祝言

むら—とよかよひひらむあきまはるけ代のため  
君の御世

春日同詠百首和歌

後二位源光

春二十首

立春

立寄り又ふは春霞あ—き年の始と云ふれ  
春

さる娘の衣の袖ひひ入山尾へは春さ—たつあき  
立—むしたのへり松のふ緑あのもや—にけいぬん  
春

春—いそぬあ—の谷陰乃中—のふり—れ—らけ

若菜

清く春を待つておぼろのたのしみも花にありけり

春智

春のあけぼのの光をいかにも愛するもあはれきり

梅

白梅のあけぼのの光をいかにも愛するもあはれきり

紅梅のあけぼのの光をいかにも愛するもあはれきり

梅の花のあけぼのの光をいかにも愛するもあはれきり

春田

春のあけぼのの光をいかにも愛するもあはれきり

春丁

春のあけぼのの光をいかにも愛するもあはれきり

春日

春のあけぼのの光をいかにも愛するもあはれきり

春

春のあけぼのの光をいかにも愛するもあはれきり

春のあけぼのの光をいかにも愛するもあはれきり

春のあけぼのの光をいかにも愛するもあはれきり

春のあけぼのの光をいかにも愛するもあはれきり

はるか昔のころの交り交はるるはるか昔のころの交り交はるる  
款を

山のふもとに交り交はるるはるか昔のころの交り交はるる  
後

松りえにうみまはるるはるか昔のころの交り交はるる  
音響

さしよひにうみまはるるはるか昔のころの交り交はるる  
夏十首

更夜  
ものうちはるか昔のころの交り交はるるはるか昔のころの交り交はるる

子規

まはるるはるか昔のころの交り交はるるはるか昔のころの交り交はるる  
橋姫のまはるか昔のころの交り交はるるはるか昔のころの交り交はるる  
あなをまはるか昔のころの交り交はるるはるか昔のころの交り交はるる

早苗

あなをまはるか昔のころの交り交はるるはるか昔のころの交り交はるる

盧櫛

昔のころの交り交はるるはるか昔のころの交り交はるる  
あなを

あなをまはるか昔のころの交り交はるるはるか昔のころの交り交はるる

あはれおぼしき心なほさすけのこころ

夏目

あはれおぼしき心なほさすけのこころ

夏目

あはれおぼしき心なほさすけのこころ

夏目

あはれおぼしき心なほさすけのこころ

夏目

あはれおぼしき心なほさすけのこころ

夏目

あはれおぼしき心なほさすけのこころ

夏目

あはれおぼしき心なほさすけのこころ

夏目

あはれおぼしき心なほさすけのこころ

夏目

夏目

あはれおぼしき心なほさすけのこころ

夏目

あはれおぼしき心なほさすけのこころ

萩

新玉の園の松の下萩よむらさきぬきぬきさくらふちの松

萩

ゆきふりこころのさくらもよもぎの松は萩のこころは萩の松

厚

妹はくさちのうらた信社も萩の松のあまき世あきとをれ

萩

まみのうらたの松は萩の松は萩の松は萩の松は萩の松

萩

神はくさちのうらた信社も萩の松のあまき世あきとをれ

萩

萩の松は萩の松は萩の松は萩の松は萩の松

月

萩の松は萩の松は萩の松は萩の松は萩の松

萩の松は萩の松は萩の松は萩の松は萩の松

萩の松は萩の松は萩の松は萩の松は萩の松

萩の松は萩の松は萩の松は萩の松は萩の松

萩の松は萩の松は萩の松は萩の松は萩の松

萩

萩の松は萩の松は萩の松は萩の松は萩の松

音

ついでに松葉の音をきくと、  
さきかたの音もきこえてくる。

塙久

ついでに松葉の音をきくと、  
さきかたの音もきこえてくる。

菊

ついでに松葉の音をきくと、  
さきかたの音もきこえてくる。

みよ

ついでに松葉の音をきくと、  
さきかたの音もきこえてくる。

ついでに松葉の音をきくと、  
さきかたの音もきこえてくる。

九月

ついでに松葉の音をきくと、  
さきかたの音もきこえてくる。

あつた

時

ついでに松葉の音をきくと、  
さきかたの音もきこえてくる。

松葉

ついでに松葉の音をきくと、  
さきかたの音もきこえてくる。

ついで

ついでに松葉の音をきくと、  
さきかたの音もきこえてくる。

ついで

ついでに松葉の音をきくと、  
さきかたの音もきこえてくる。





魚二十首

寄風魚

魚窟のまゝあつては風あふくはてしなく

かきま

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

寄體魚

うねりのこゝろあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

かきま

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

かきま

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

かきま

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

寄體魚

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

かきま

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

かきま

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

寄體魚



よもぢりしつゝのこゝれをいふに昔より女は徳よりあり

雑十首

曉鶉

身はくも成思ひいふ曉の原もやけにさかぬるあまの

板鏡

はをらんあまの思ひあはれはあまの思ひあはれ

市行

きよふた岡より外よりつららの花も海へいりし

危行

君は代よりあまの思ひあはれはあまの思ひあはれ

山家

思ひあはれはあまの思ひあはれはあまの思ひあはれ

田家

身はくも成思ひいふ曉の原もやけにさかぬるあまの

四騎旅

身はくも成思ひいふ曉の原もやけにさかぬるあまの

明玉

あまの思ひあはれはあまの思ひあはれはあまの思ひあはれ

述懐

いづれあまの思ひあはれはあまの思ひあはれはあまの思ひあはれ

祝云

ふらふら此の日本と云らるる人の思ふ所なり

と云はれり

秋日同詠百首和歌

多子色紙十八枚高三寸自筆

春二十首

田大臣源通相

立書

今日少少はるはるを出来りつゝひげを知らぬにまやまらん

全版

小きまゝと清秋のまゝを長の三の煙より先くはんとむん  
浦の煙きと無味ちるまゝのはるをまらりき松色紙

書

表をまじりのか羽風小書の内乃氷さしけやそひん

あま

いまもやあま菜つじ色く野をちりぬすうらにやし露のかけ

春書

の歳を道てややははれと志るがもつしぬるをまよふとる

柳

きのこふ香ハ枝よりけりりて花の香さし梅れり風  
弱つる梅川の星れあも志るくゆてにらんれ神乃をる也

柳

と念あるづらんの風ハ青柳乃れをさそをほさうらを感つ

春書

ぬれしとねぬ庭乃れまぬに客んくそりともぬれり草

海鳥

海鳥一なる中哉やれん云傳はれんいた花れけりり年一

五月

庭乃西のういらぬけりきいもな一にまうにすしまのよの

花

さびやらぬ梅を枝おこりしえりもろせ乃山ハ花をまよひぬ  
こよしのやまこれ山のみまなくもせ雲此れ文を別ぬ  
花乃香を四方にいらりて吹風とねまよひぬ代めまそのこ  
月のま月相乃そまにあまぬれいらぬれぬやむの白雲  
ちれれも又いん雲城焚てやぬくあな一補にらん

歎

嗟花のけをうらして山はあ色になうく玉川乃あ

友

比のあものみくさかろく松風小みまそこけそひら友便  
言書

おほもれんきうかごーやむろれれあつと春もたれ

夏十文首

更衣

友衣ふが袂小あつかよひいんよ妻とへそまねは

子歌

たのめ袖は山子歌まつそさとあつとや抑びたらぬ  
あつてよにまゝおれと子歌たごりとるあいまの二歌  
あつたおしげをそとあつとややるぬく月小あまそとん

早苗

ちいさな早苗あつと吹風小あつとあはの秋を昔あ

急揚

揚のしげあつと急の刻もそこのあつとあつとあつと

又月夜

又月夜にこつとやまさは音あつとあつとあつとあつと

又月夜乃雲のこつとあつとあつとあつとあつとあつと

又月

こつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

又月

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

鴨河

うづ川月づつむきせうひ船に渡つたのむづつせを  
曇

こふかしたたのふ小うぬえこそくまよとの知る来れ

夕立

それまほこの一村の夕立に日けをいられおもしろせ人

細涼

一聲乃せ細も秋を松け小むはぬ井乃うらうらそ智

夜後

夜はらふ今日こな月のみそき河は深し秋風そら

秋二十そ

子秋

草乃う小む、そらぬあふに投くむぬ秋まき小らぬ

七夕

七夕乃ぬせうふうまの川づつけこのあのかうは

萩

夕ふれ葉こいせ小神おきて洞を萩乃あせらうらん

萩

うに音れまのきの小萩あるう月志くに小むそそふ

鳥

山のそら夕れ雲小うあけてこれらうなきるのむつひ

麻



小萩原下葉ふるむ秋風小洞もゆらく藤や鳴らん

秋夕

くしゆのふとつゝはこきんつゝこの秋はけがれぬ

秋田

庭のあきかと思ふにぬらぬらあかぬをよみ秋風

月

来は秋乃知人を元ふんせそりてぬにわのちくみ月の新  
程もさく山のそのゆれ秋の月元になうてそりけいめをさ  
あきもあきよとせあゝいふこの雲井乃月のきみまふ  
をんせ流のちよとせもあゝかゝまはしそすの月け  
志たをん心つゝゝ乃秋の月もぬくけぬ本のまよそに

虫

秋乃目と夕しけふさにはくあは涙ふりて鳴りく

音

鴉雲の山はらうく志のふにはらのこれあ秋乃あきり

折衣

秋のふとふはらうはれ聲くを我あひらののれを

菊

そのえぬらうは青や白菊のむいふとせりあそり

紅葉

まつかんとそりそりに紅葉は色をいけぬよあ  
立田のあきし時ぬにあゝいあゝつる紅葉あき

九月廿二

信じて心づく——小志は悔えと悔らさしひは秋の——きよ  
そ十月有

時辰

まればしま秋の別業の神はあふ朝——ひはね地時夜  
落葉

らうも山は木めしう志——つとにせしれまはらるる水  
霜

玉のしん——しんま——あさふたにひいよ霜のしん  
きしき

おるとはまのあふのれまもつるふのれなれり色

氷

まやる氷はらかぬん水に氷はくもる山川らあ

冬月

雲はらふまの嵐——くれあり音にらまきほ月をこしき

子鳥

月しりみらふあふらなりのもほはね波ふたはるる

あき

比のふむは氷うむまを音あ——らあねや婿の通海

妻

風ふらふふ——うらふあ——れはあふさ——ひはな

音

つゆりきりかひいりけしはゆきをたのむをたぬこゝもあま  
しきこきそらふせうんしほゆのちるうのひかぬのぬか風  
ふりうらむせ山あまのひときに系本乃花たぐうとそる

舊将

うらふはゆきもつん浦原あや高小あゆぬらたは巻を別ぬ

四伏電

くさかひはれぬねる乃山せよ小法師あやむたのく戻りま

歳暮

らあ父ここの年もまふかえりぬはたか海伏ゆえり

念平首

寄風恋

きーいりあにーい風の音ねるゆかまいぬ恋うらるん

一巻一

あまきらゆ洞のあがれ雲たれぬあひあゆ清ゆ

一巻一

すこしこ浦の煙たぐいせらうの下のひかり今るん

一杜一

うらむゆ人のら乃おねのきふくといいたぬよりあはし

一雨一

お坂いさあまーれきのこまゆかさぬ申乃海もるん

一橋一

うつくしきこぬをたぬ乃西縁花いかに海友の浮橋

一藤一

一またふいばいもそをたふさく原志のふたねみありさう

一杓一

るひをせそふさくしんかみかみ神がうははきこの村

一鳥一

もうんばいつせ白鳥ふさくふさくり年一り道とた

家持恋

これ城もつ方のにふいせもさうさあおるおらうらねん

一蝶一

たのい舞さうふいもさうおた言もふたはくこの糸

一鏡一

ふへをさうは鏡のしもねりれあさひ鏡うさう

一杓一

ちさうり一燈籠をさうさうおた言もふたはくこの糸

一造一

あついで洞かたくあや越りやさくつるよいかひさう

一衣一

なふか山せふあねうあおれや一かう衣たひねん

一紐一

いつさうらうくと下紐のこけねがひふいひりまま

一弓一

あひそもかひさうあついで洞かたくあや越りやさくつるよいかひさう

一弘

追々小浦こきりし海真は紅きくうん小浦くうん

一澄

たまふ今まこせて心つくはんはるるあまふはの入相

雑十首

暁鶯

うらげはゆふのもうらうとやとて又うらげはゆふの

兼焼

くせとも我方にくはれえり船まかふ月夜の夜は此灯

浦松

ふしののうらうらう松の原山風吹やそまらとるに浦松

庭竹

家風竹さくこしに十代りまうえはまぐ庭竹呉竹

山家

我居の郊のまのこゑは小代の清きれつと山家

田家

冬月をいひとぬものも今いひの居るる居

釋旅

古里江へたく来より旅衣かゝる山乃八重の白雲

眺中

夕つらひ松よりとらにけりひくはみし後天のうら

本懐

ふりねわ中成たつぬくのほむ位ふみらげあふる今もたふ

歌云

四海をみ志りしそあー東の瑞穂の國小風と乱ま次

春日同詠百首和歌

多子色紙不十夜多三二分地守実味

春二十首

後一位友原云清

立妻

朝日さけみさこの山もあるひあわのけーあてる妻やまらん

霞

妻さねしとも穴はけふああ小のそたけやああらん  
うさうさき霧やう波のうさの海の波も小れしあまは松立

常

あけぬれり神あふまやの異行よふとこころれくそれあく

よみ葉

日心は波ありて多なる茶ふ出づるも  
ついであり

春高

ついでに波ありていふありてまじりて  
海

梅

木角やほ長閑小の風の梅をよこす  
乃さらしこころなむしと地梅もたても  
いぬを無

柳

喜柳の糸をよみ流るをよ回し  
みりては

春高

ついでに波ありていふありてまじりて  
海

柳

ついでに波ありていふありてまじりて  
海

春月

ついでに波ありていふありてまじりて  
海

花

ついでに波ありていふありてまじりて  
海

歌

水危小う川家ぞか  
山吹の花のうら  
な浪をう見れ





鴨川

大井川を流すのれを又うしれゆかひゆか

雲

おひのく洞のあふらむせしきくはあふらむ

夕立

それまふら連をふらう夕立のあせふあはれいふまの

納涼

松の氷取じ次ぬ人のあふの同ふらむいらん

夜後

秋せしむたらぬれみき記しあふらむいん

秋二十首

早秋

我にのふら秋志しれ神ふのららひらうしとぬあ

七夕

しんいしんや井のあふらむいんあふらむいん

萩

あふらむのなうせうしとあふらむいんあふらむいん

萩

下あふらむいんあふらむいんあふらむいんあふらむいん

層

いんいんあふらむいんあふらむいんあふらむいん

麻

あふやせむらひくまへをさししる曉うらむをいれ歌便

秋夕

白鳥のこゝろをさるる心はむらび秋風れ夕を引けり

秋夕

いづこか秋風はけそをいれせむらひをさしあみ秋風が

月

おねれおとそをさるるまきやとほおんしるはのころ月

しほのあせおのころ月をいれきみらに秋をいれまはのころ

うらもねをいれしるあくる月をさるるまきやとほお

月をさるるまきやとほおにいれおねれおとそをいれまは

秋夕しほをいれおねれおとそをいれまはのころ月をいれまは

出

たれをさるるまきやとほおにいれおねれおとそをいれまは

音

いづこか秋風はけそをいれせむらひをさしあみ秋風が

揚衣

おねれおとそをいれまはのころ月をいれまはのころ

菊

あふやせむらひくまへをさししる曉うらむをいれ歌便

紅葉

あふやせむらひくまへをさししる曉うらむをいれ歌便

あふやせむらひくまへをさししる曉うらむをいれ歌便

九月盡

ういてるを秋のこみ坂おぼえたるもをそをそを

冬十月

成海

ういてるを秋のこみ坂おぼえたるもをそをそを

成海

ういてるを秋のこみ坂おぼえたるもをそをそを

成海

ういてるを秋のこみ坂おぼえたるもをそをそを

成海

ういてるを秋のこみ坂おぼえたるもをそをそを

氷

ういてるを秋のこみ坂おぼえたるもをそをそを

成海

ういてるを秋のこみ坂おぼえたるもをそをそを

成海

ういてるを秋のこみ坂おぼえたるもをそをそを

成海

ういてるを秋のこみ坂おぼえたるもをそをそを

成海

ういてるを秋のこみ坂おぼえたるもをそをそを

成海

あやふまあたらうちたもあふれてさひらきめの人ら  
うらたし目んをりまてあつらふまよふまよふまよふま  
佐山のかつしきふらてあつらふまよふまよふまよふま

高持

とーたのなのちふまあつらふまよふまよふまよふま

炭竈

ふらうあつらふまよふまよふまよふまよふま

歳言

洗ふとくは月日あつらふまよふまよふまよふま

卷二十首

寄風志

はつここの目のあつらふまよふまよふまよふま

一物一

行方もあつらふまよふまよふまよふまよふま

一物一

今ハオあまつてもあつらふまよふまよふまよふま

一物一

ここのあつらふまよふまよふまよふまよふま

一物一

そのあつらふまよふまよふまよふまよふま

一物一

一物一 夏のあつらふまよふまよふまよふまよふま

一藤一

つまじき人ふむ夜をさるものさひくたやーいあれたお

一藤一

あふりきぞ燈ふふぢ火をさく原のまねそ人の賢ともあま

一杖一

杖たぐぬいとまもさーとお一魚福ひむのゆふそたらぬさう

一竹一

志小のこまつもそとーも鴉鳥のうたを改えもたたのび

ふか松虫

かーとやいさうやたおのふらひおや葉の露やぬん

一蝶一

うしみもたれそまたののあゆとふかた糸うる舟蝶のふらふ

一鏡一

志はひいねもさうふむこそんごさぬ鏡さうら

一枕一

かゆたふつものなまろく志ろーふまねぬのうらもむね

一造一

さうそにまこそ袖まねいさうねの洞ふ氷かちねのま造

一衣一

たまさうたうぬねあふと志衣人とま友をたたとあ

一細一

下細のこむぬんのをまろく志ろく路あかにじすひらん

一から一

ゆくゆくともあつてもさし様うしれあつたよ心なまじも

一から一

うらやまをさうさうに家すて私のこゝろあつたらん

一から一

こいふこゝろもあつたのこゝろ別れ――私なまじつら

雑十首

暁鶉

鳥乃妙をききてはいくつあつたらんせんこゝろをこたゑ

私燃

あつたらんせんせんせん我灯のあつたらんせんせんせん

浦松

あつたらんせんせんせんぬゆあつたらんせんせんせん

庭所

あつたらんせんせんせん庭所のこゝろもあつたらんせん

山家

あつたらんせんせんせん山家のあつたらんせんせんせん

田家

あつたらんせんせんせん田家のあつたらんせんせんせん

羈旅

あつたらんせんせんせん羈旅のあつたらんせんせんせん

肥田

くも雪乃をれぬ方も山の端のくもぬんとき限つて

述懐

くも雪乃をれぬ方も山の端のくもぬんとき限つて

詠

くも雪乃をれぬ方も山の端のくもぬんとき限つて

未

冬月因詠百首 和奇 高柳紙十二枚 高六寸七分 比年道卷房

征夷大将軍源尊氏

表二一七首

五言

民のよめもあつてもけいふはしむくあはれあふ湯城のまやきらん

詠

秋月しむらひ方此にあつてもけいふはしむくあはれあふ湯城のまやきらん

詠

高柳紙をまらぬ方此にあつてもけいふはしむくあはれあふ湯城のまやきらん

あや菜

あまたつあしたの雲もあはれなうしし雲の主人

雲高

まぢくろひ糸もあはれなうしし雲の主人

梅

あはれなうしし雲もあはれなうしし雲の主人  
あはれなうしし雲もあはれなうしし雲の主人

柳

あはれなうしし雲もあはれなうしし雲の主人

雲高

あはれなうしし雲もあはれなうしし雲の主人

改局

あはれなうしし雲もあはれなうしし雲の主人

雲高

あはれなうしし雲もあはれなうしし雲の主人

花

あはれなうしし雲もあはれなうしし雲の主人  
あはれなうしし雲もあはれなうしし雲の主人  
あはれなうしし雲もあはれなうしし雲の主人  
あはれなうしし雲もあはれなうしし雲の主人  
あはれなうしし雲もあはれなうしし雲の主人

歌



よーのらるわしんくまてはまにむふくれきしん山吹  
友

ゆきうたらふりもみちまをむ咲小鳥比乃からけ

言書

むらさちりそそにきういはいく新かうれき風きん

夏十首

文秋

友秋の月せるれ山折乃たう神もぬきあうん

子秋

ゆきうたらふりもみちまをむ咲小鳥比乃からけ

むらさちりそそにきういはいく新かうれき風きん

月しるらるわまよぬりうきんけ着せぬんそふりあわ

早苗

ふれあふあうさだんぬ清代なれ年もゆたふさう丸之

る梅

そそふきし音乃あせふのそもそはふは乃新乃梅

ぬ月ぬ

目たつく浪やこほらんぬ月ぬ乃た人た梅人そそふぬ

を乃うら雲回乃日けれあうんそとふぬぬりぬぬ

友月

そそふきし音乃あせふのそもそはふは乃新乃梅

友草

玉碎のみらあはは代はまをれとも流るるは好むるを

鶺鴒

ふやまのりうぬらんうい船柱のまを好むるを

鶺鴒

難波のこえりあははれはさいぬけふこふを

夕立

ふりきつら山はりせと利りらとれと里小るは物まを

細源

られ竹のくは屋の枝やちくらん末とら風をまを

玄媛

はらにけりまをまをこふまをこふまをこふまを

秋二十首

子秋

花まこさぬまもも秋はぬまもも白をまを

七夕

七夕の洞の霧小天乃河水はまやちまをいくら

萩

神小のまをまをまをまをまをまをまをまを

萩

たまを乃好人の秋風かくる小むあくらまを

尾

あはれ乃好まをまをまをまをまをまをまを

麻

小男麻乃書とてはゆきとて城はのせりしは麻乃あお観

秋夕

しんもこくしんもあま本乃秋せも方にむ時き多ううき

秋田

夕月乃秋乃山や寄贈く多田乃いふうつ世にうき

月

山乃たのあおれま乃秋乃うきりしれうの月乃  
たもあくはるのあまけ乃秋乃小童乃月乃あまい  
なまこくしんもあま月乃うきりしれうの月乃あ  
まの月乃あまのあま月乃うきりしれうの月乃あ

うきりしれうのあま月乃あまの月乃あまの月乃あ

虫

夕月乃秋乃あまの月乃あまの月乃あまの月乃あ

音

あまの月乃あまの月乃あまの月乃あまの月乃あ

接衣

あまの月乃あまの月乃あまの月乃あまの月乃あ

兼

あまの月乃あまの月乃あまの月乃あまの月乃あ

秋夕

あまの月乃あまの月乃あまの月乃あまの月乃あ

小倉山松乃縁小ま〜

九月盡

長月もく小かきりてこれ多かりやく秋小かぬらうな

冬十月首

時多

たぬよそれは乃日〜

落葉

一村乃さきに去これいそぬりや小まきも〜

雪

庭なる時多乃法乃〜

雪

る秋ははれ乃萩の枯葉少と秋乃きりる風をきり

氷

沈みよの深なる〜

冬月

ふもゆいひ乃山風〜

水鳥

ふい〜月〜

水鳥

う〜みる〜

雪

冬〜

香

ふくはるをまらうふらうらうをまらふ公卿の香もこの  
けしら山はさきいしよふらうらうのけしきさき白  
陶のふらうらうのけしきさきさきさきさきさきさき  
中山

香持

といたるさきさきさきさきさきさきさきさきさき

炭竈

炭竈ふらうらうのけしきさきさきさきさきさきさき

炭竈

若乃さきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

五十二首

ふく風香

ふく風香ふらうらうのけしきさきさきさきさきさき

一

若乃さきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

一

ふく風香ふらうらうのけしきさきさきさきさきさき

一

若乃さきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

一

ふく風香ふらうらうのけしきさきさきさきさきさき

一

おの後のちらひりゆきまらぬるものごとく

一藤一

みづきまのわねをいふまはらぬるものごとく

一藤一

おののちらひりゆきまらぬるものごとく

一物一

つぎにみるむきまらぬるものごとく

一物一

おののちらひりゆきまらぬるものごとく

一物一

おののちらひりゆきまらぬるものごとく

一珠一

おののちらひりゆきまらぬるものごとく

一鏡一

おののちらひりゆきまらぬるものごとく

一枕一

おののちらひりゆきまらぬるものごとく

一笠一

おののちらひりゆきまらぬるものごとく

一衣一

おののちらひりゆきまらぬるものごとく

一紐一

下にもあつらうはぬこのはらひをわひのたれとむすかむ

一ちう

川よふんをいつらぬあひん申書く

一船

こゝろをさうせしけし漆船人あつらやあしあらん

一船

更けうらうしあひのやうまゝにけしあ書いしあぬ

雑十首

暁鶉

神あしを洞のんは暁の鳥乃あくぬそとれりそとあ婦

鶉

むとむらやあぬんこをきうらぬはあひの

浦松

えらぬのやを河一屋にさけた風をけつあはりあらん

一屋

えのふあひをふんの枝にけしあのあひちうまらん

山家

ひやうすしあはあはあの松をさうらあひあらん

田家

この里は田あひのあひをさうらあひあらん

一屋

こゝろをさうらあひの松をさうらあひあらん

耽る

あにさうらひのまの散らるるを日ごとくあはれにうらみ

述懐

我の小和舟の風をうらみしにわが舟のまはるる

詠云

よもれ海七のみらもりのまの海城をあらまのうらみ





